

八重瀬町の歴史

たどり 日本人のルーツを辿るまち

「港川人」のいた時代から今日まで八重瀬町では全ての時代の遺跡が発見されています。

それは、先史の古い時代から八重瀬が住み良い環境であったことを物語っています。



港川フィッシャー遺跡発掘調査風景

旧石器時代の化石人骨
「港川人」

「しものよのぬし」と
呼ばれた
八重瀬按司・汪英紫
エージ

に築城した汪英紫(エージ)は南
山王承察度の叔父で「しものよ
のぬし」として隆盛を極めたと
伝えられています。



多々名グスクに残る石積み

具志頭間切を治めた
「具志頭親方蔡温」
サイオン



伊舍堂墓(南風原按司守忠とその子花城親方守知の墓)
守忠は南山王他魯毎の弟で、守知は尚真王の養父を勤めました

蔡温は農業生産の向上を目指し、治水・灌漑事業を実施し、全国の河川改修を行いました。また、全国の耕地の測量調査や山林改革、王府財政の建て直しを図りました。

この時代、本町中央に流れる報得川を改修し、東風平一帯の水田に灌漑施設の整備を行い米の大増産が図られるようになりました。

廢藩置県後、一八八〇年(明治十三年)行政区の編成が行われると東風平に島尻地方役所が設置され、一時期十五間切の事務を監督指導する政治の中心となりました。

その頃沖縄は、廢藩置県によって日本の一県になっていましたが、旧慣温存政策がとられ、旧藩時代のままであったことから、人々の生活はいかわらず困窮していました。

そのような時期に、第一回県費留学生であつた東風平出身の謝花昇は、県庁に技師・高等官として就職しました。県庁在任期間を苦しめていた色々な制度の改

謝花昇と県政改革

沖縄戦の激戦地

東風平村のケービン

1945年八重瀬岳を見上げる米軍(富盛の石彫大獅子)

五月下旬、米軍の進行と日本軍司令部の南部撤退によって、東風平村・具志頭村に日本軍が流れ込んでくると、陣地として使用する目的から住民は避難場所を奪われました。日本軍は、具志頭から八重瀬岳、与座岳を経て真壁村国吉に最後の防衛線を敷きましたが、六月中旬、米軍が激しい戦闘が繰り広げられ六月十八日に米軍に占領されました。沖縄戦での戦没者の数は、東風平村で約四、〇〇〇人、具志頭村で約二、三〇〇人、両村とも五割近い犠牲者を出し、終戦を迎えました。

一般住民は、羽地、久志、金武、具志川、美里、知念、玉城など分散して米軍施設へ収容された後、一九四六年(昭和二十一年)一月、南部地域への住民の帰村の許可



1945年八重瀬岳を見上げる米軍(富盛の石彫大獅子)

昭和二十年代後半から三十年代にかけて、具志頭村内とその周辺に、米軍基地が建設されたため住民は、土地収用反対の抗議や陳情を行いました。しかし、米軍がそれらを聞き入れませんでした。

本土復帰を迎える、道路や生活環境基盤が整備されていく中、那覇市のベッドタウンとして人口が増加した東風平村は昭和五十四年町制を施行し、田園都市としての街づくりが進められました。

平成十八年一月一日東風平町・具志頭村が合併し八重瀬町が誕生しました。